

国立医療学会誌「医療」の歴史

国立医療学会「医療」
編集委員長

大島久二

IRYO Vol. 70 No. 1 (5-10) 2016

はじめに

国立医療学会誌「医療」は、2016年に第70巻を発行するに至った。昭和21年に第1巻第1号が発行され、その後脈々と論文を掲載し70年を経て70巻となった。この機会に、「医療」の創刊当初の資料を整理することとした。旧国立病院が創設された時と同じくして、現在の国立医療学会の前身である「医療同好会」が設立された。そしてその機関誌として「医療」が発行されたことは、当時の我が国のおかれた状況を再考するとともに、継続的に国民医療に資するために我が国が考えてきたことを知る上で大変貴重な資料になると思われ、今後の我が国の医療の発展に資するものと考えられる。

創刊号

昭和21年10月1日、「医療」第1巻第1号が創刊された(図1)。旧字が多く使われているので、一部紹介する場合には現代の漢字で表記させていただく。本誌は、当時東京都麹町区代官町1丁目1番地に有った医療局の「医療同好会」が発行所であり、編集兼発行者は医療局の新見正喜氏となっている(図2)。投稿規定にあたる「投稿に就て」という文面もみられる。

本誌で特筆すべきは、当時医療局長官であった塩田廣重氏による「発刊の辞」が掲載されていることであろう(図3)。現在も続く国立医療学会の「塩田賞」の塩田氏である。旧字が多いのと誌面の劣化があり読みにくい面があるので、若干の修正と現代の漢字で以下に掲載した。括弧内は著者の注釈である。

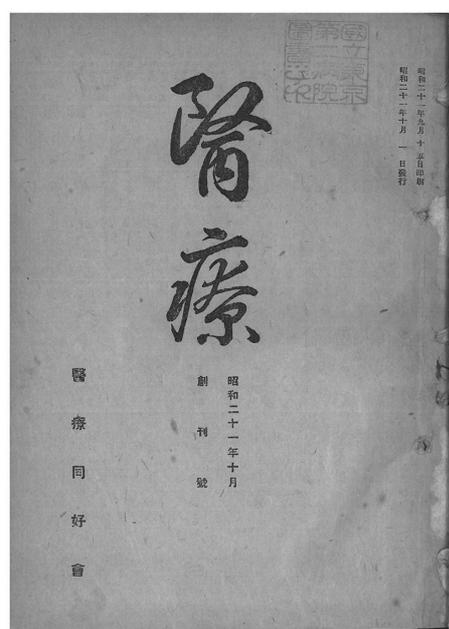


図1 「医療」創刊号の表紙

発刊の辞

医療局長官 塩田廣重

今茲(本年)に医療局より発刊される医療の前途を祝福するに際してはまず医療局の新設と国立病院及び国立療養所の使命について略述する必要がある。

昨昭和二十年八月肇国(建国)以来未曾有の画期的大事件発生によって国内に種々の変革が行われたにつれて陸海軍病院も国立病院へ改められ同時に傷痍軍人療養所もまた国立療養所と改称され従来の国立療養所もまたこれに加えられてその12月1日新設された医療局の管下に統括主宰されることとなった。こうしてこれら国立病院ないし国立療養所においては従来の軍病院のごとく傷病軍人のみを救療

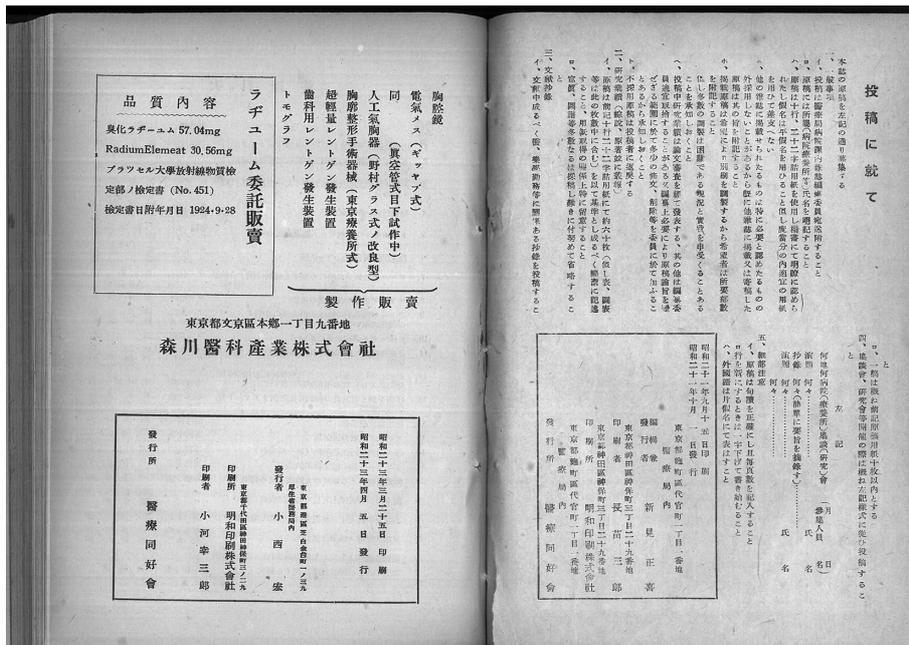


図2 「医療」創刊号の「投稿に就て」

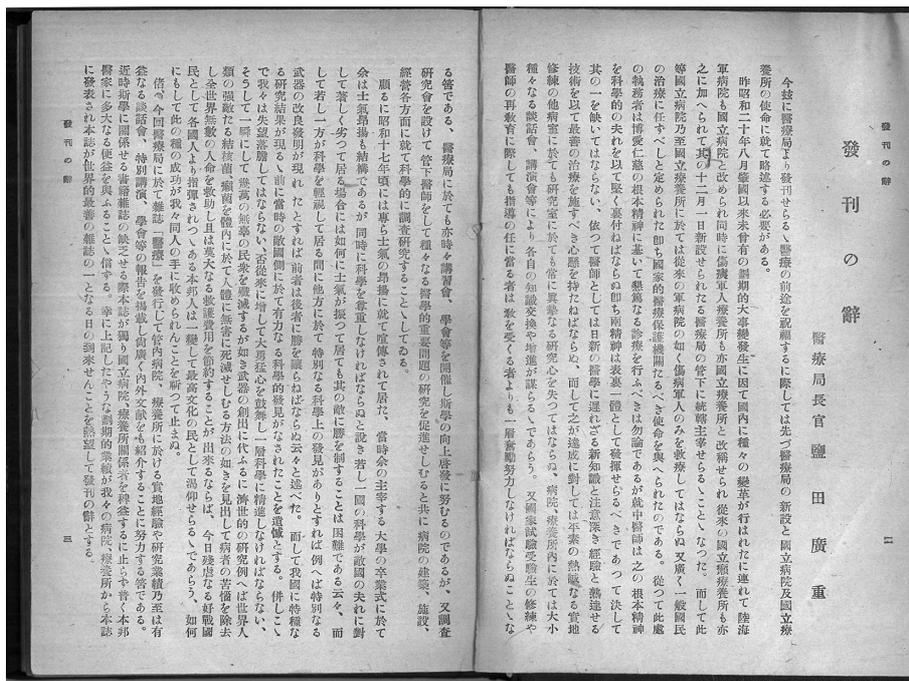


図3 医療局長官 塩田廣重氏による「発刊の辞」（創刊号）

（治療）してはならぬまた広く一般国民の治療に任ずべしと定められたすなわち国家的医療保護機関たるべき使命を与えられたのである。したがってこの執務者は博愛仁慈の根本精神に基づいて懇篤（懇切丁寧）なる診療を行うべきはもちろんであるが、なかんずく医師はこの根本精神を科学的のそれをもって堅く裏付ねばならぬ、すなわち両精神は表裏一体として発揮されるべきであって決してその其一を

欠いてはならない。よって医師としては日新の医学に遅れざる新知識と注意深き経験と熟達した技術をもって最善の治療を施すべき心懸を持たねばならぬ、こうしてこれが達成に対しては平素の熱誠なる（真心のこもった）実地修練のほか病室においても研究室において常に真摯なる研究心を失ってはならぬ、病院、療養所内においては大小種々なる談話会、講演会等により各自の知識交換や増進がはかられるで

表 1 国立医療学会の歴史

昭和 21 年	国立病院, 国立療養所の使命達成のため, 会員の識能向上及び相互親睦を図るを目的とし, 国立病院, 国立療養所の同好者をもって医療同好会を発足. 会長を医療局長官塩田廣重氏とする
昭和 21 年	「医療」創刊号を発刊
昭和 23 年	「医療」第 1 巻 4 号を発刊 主に用紙事情のため, 発刊が遅れる.
昭和 39 年	第 19 回総会において新会則を可決. 国立病院, 国立療養所, 国立がんセンターおよび国立多摩研究所の医療の進歩発展と会員の相互親睦を図ることを目的とし, 正会員を国立病院, 国立療養所, 国立がんセンターおよび国立多摩研究所等に勤務している医師, 歯科医師及び薬剤師他, 特に希望するものとした.
昭和 43 年	第 23 回総合医学会総会の席上, 第 1 回塩田賞授賞式が行われた.
平成 13 年	学会事務局を厚生労働省内から (財) 政策医療振興財団内に移転
平成 16 年	国立病院, 国立療養所の独立行政法人化にともない会則を変更 16 年 4 月 1 日現在 会員数 1,352 名
平成 19 年	有限責任中間法人国立医療学会となる
平成 21 年	一般社団法人国立医療学会となる
平成 27 年	12 月現在 会員数 1,710

あろう。また国家試験受験生の修練や医師の再教育に際しても指導の任にあたる者は教えを受けるものよりも一層奮闘努力しなければならぬこととなるはずである。医療局においてもまた時々講習会, 学会等を開催し学問の向上啓発に努めるのであるが, また調査研究会を設けて管下の医師に種々の医学的重要問題の研究を促進させるとともに病院の建築, 施設, 経営各方面について科学的に調査研究することとしている。

かえりみるに昭和十七年頃にはもっぱら士気の昂揚について取りざたされてきた, 当時私の主宰する大学の卒業式において私は士気昂揚も結構であるが同時に科学を尊重しなければならぬと説き若い一国の化学が敵国のそれに対して著しく劣っている場合にはいかに士気が勝っていてもその敵に勝利することは困難である云々, またしても一方が化学を軽視している間に他方において特別な科学上の発見があるとすれば例えば特別な武器の改良発明が現れたとすれば前者は後者に勝を譲らなければならぬ云々と述べた。こうしてわが国に特殊な研究結果が出る前に当時の敵国側において有力な科学的発見がなされたことは残念なことである。しかしここで我々は失望落胆してはならない, いや従来に増して大勇猛心(勇敢な心)を鼓舞し一層科学に精進しなければならぬ, そうして一瞬にして大勢の罪のな

い民衆を滅ぼすような武器の創出に代わる済世的な研究, 例えば世界人類の強敵たる結核菌, 癩菌を体内において人体に無害に死滅させる方法のようなものを見出して患者の苦悩を除去し全世界無数の人命を救助ししばらくは莫大なる救護費用を節約することができるならば, 今日残酷なる好戦国民として各人より指揮されつつある日本人は一変して最高文化の民として渴仰(かつごう: 深く慕われる)されるであろう, いづれにしてもこの種の成功が我々同人の手に収められることを祈ってやまない。

さて, 今回医療局において雑誌「医療」を発行して管内病院, 療養所における研究実績ないしは有益なる談話会, 特別講演, 学会等の報告を掲載しなお広く内外文献をも紹介することに努力するはずである。

最近この分野の学問に係る書籍雑誌が欠乏する際, 本誌が唯一国立病院, 療養所関係者に役立つにとどまらず, 広く本邦の医師に多大なる利益を与えることと信じる。幸いに上記したような画期的業績が我々の病院, 療養所から本誌に発表され本誌が世界的最善の雑誌の一つとなる日が到来することを熱望して発刊の辞とする。

この発刊の辞を読めば当時に我が国のおかれていた国内並びに国際的な状況がよくわかる。更に, 今

表2 国立病院総合医学会の歴代開催地、会長施設、副会長施設

年次	回次	開催グループ	開催地	会長施設	副会長施設
昭和21年	第1回	関東信越	横須賀	久里浜	
昭和22年	第2回	近畿	大阪	大阪	
昭和23年	第3回	九州・東海北陸	別府・静岡県浜北	別府	天竜荘
昭和24年	第4回	関東信越・東海北陸	東京・静岡県浜北	東京第二	天竜荘
昭和25年	第5回	近畿・東海北陸	大阪・静岡県浜北	大阪	天竜荘
昭和26年	第6回	関東信越	東京	東京第一	
昭和27年	第7回	近畿	京都	京都	宇多野
昭和28年	第8回	九州	熊本	再春荘	熊本
昭和29年	第9回	東北	仙台	宮城	
昭和30年	第10回	関東信越	東京	東京第二	
昭和31年	第11回	東海北陸	名古屋	名古屋	大府荘
昭和32年	第12回	中国	岡山	岡山病	岡山療
昭和33年	第13回	近畿	京都	宇多野	京都
昭和34年	第14回	東海北陸	金沢	金沢	石川・北陸荘
昭和35年	第15回	関東信越	東京	中野	東京第一
昭和36年	第16回	北海道	札幌	札幌	小樽
昭和37年	第17回	中国	広島	呉	呉
昭和38年	第18回	九州	長崎	大村	長崎
昭和39年	第19回	関東信越	横浜	浩風園	横浜
昭和40年	第20回	関東信越	東京	東京第一	武蔵
昭和41年	第21回	四国	松山	愛媛	松山
昭和42年	第22回	東北	仙台	仙台	宮城
昭和43年	第23回	近畿	大阪	刀根山	大阪南
昭和44年	第24回	九州	福岡	福岡中央	福岡東
昭和45年	第25回	関東信越	東京	東京第二	村山
昭和46年	第26回	北海道	札幌	北海道第二	札幌
昭和47年	第27回	東海北陸	名古屋	名古屋	中部・東名古屋
昭和48年	第28回	中国	山口	山陽荘	岩国
昭和49年	第29回	九州	別府	別府	西別府
昭和50年	第30回	関東信越	東京	中野	医療センター
昭和51年	第31回	四国	高松	善通寺	高松
昭和52年	第32回	近畿	京都	宇多野	京都
昭和53年	第33回	中国	岡山	岡山病	岡山療
昭和54年	第34回	東北	仙台	宮城	仙台
昭和55年	第35回	関東信越	東京	がんセンター	東京
昭和56年	第36回	九州	福岡	南福岡	九州がん
昭和57年	第37回	北海道	札幌	札幌	西札幌
昭和58年	第38回	東海北陸	名古屋	東名古屋	名古屋
昭和59年	第39回	近畿	大阪	大阪南	近畿中央
昭和60年	第40回	中国	広島	広島	福山
昭和61年	第41回	関東信越	東京	医療センター	中野
昭和62年	第42回	九州	熊本	再春荘	熊本
昭和63年	第43回	四国	松山	四国がん	愛媛
平成元年	第44回	東北	仙台	西多賀	仙台
平成2年	第45回	関東信越	横浜	横浜	南横浜
平成3年	第46回	東海北陸	名古屋	中部	名古屋
平成4年	第47回	近畿	大阪	大阪	刀根山
平成5年	第48回	北海道	札幌	西札幌	札幌
平成6年	第49回	九州	長崎	長崎中央	長崎
平成7年	第50回	中国	岡山	南岡山	岡山
平成8年	第51回	関東信越	千葉	千葉	千葉東
平成9年	第52回	四国	高松	香川小児	善通寺
平成10年	第53回	東海北陸	金沢	金沢	医王
平成11年	第54回	近畿	大阪	近畿中央	循環器病センター
平成12年	第55回	関東信越	東京	東京医療	東京
平成13年	第56回	東北	仙台	宮城	仙台
平成14年	第57回	九州	福岡	九州医療センター	南福岡
平成15年	第58回	北海道	札幌	札幌南	札幌
平成16年	-	-	-	-	-
平成17年	第59回	中国四国	広島	呉医療センター	東広島医療センター
平成18年	第60回	近畿	京都	宇多野	京都医療センター
平成19年	第61回	東海北陸	名古屋	名古屋医療センター	三重中央医療センター
平成20年	第62回	関東信越	東京	東京医療センター	東京病院
平成21年	第63回	北海道・東北	仙台	仙台医療センター	宮城病院
平成22年	第64回	九州	福岡	長崎医療センター	福岡東医療センター
平成23年	第65回	中国四国	岡山	岡山医療センター	南岡山医療センター
平成24年	第66回	近畿	神戸	大阪医療センター	兵庫中央病院
平成25年	第67回	東海北陸	金沢	金沢医療センター	医王病院
平成26年	第68回	関東信越	横浜	横浜医療センター	相模原病院, 久里浜医療センター
平成27年	第69回	北海道・東北	札幌	北海道医療センター	北海道がんセンター
平成28年	第70回	九州	沖縄	九州医療センター	福岡病院, 沖縄病院

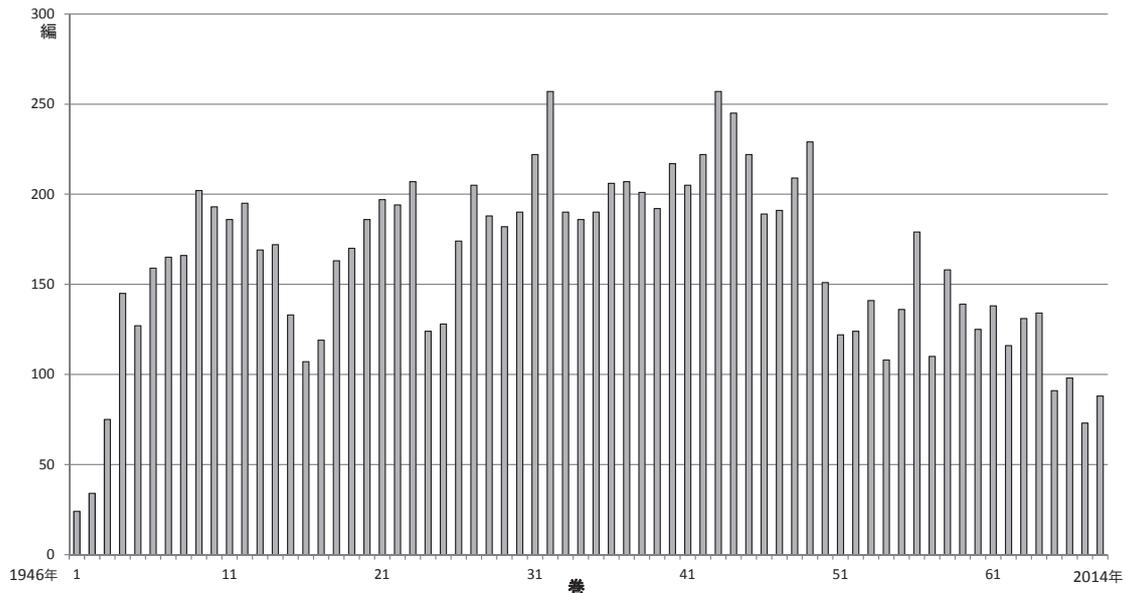


図4 「医療」掲載論文数の推移

後どのように国民衛生を向上させていくかの意気込みが伝わってくる。さらに、現在でも医療者が心がけなければならない基本的な心がここにそのまま述べられている。平素の熱誠なる実地修練（診療）、真摯なる研究心（研究）、指導の任（教育）が、すでにこの時代に把握されていることに驚きと畏敬の念を禁じ得ない。昭和21年は、陸海軍病院などが再編され、国立病院、国立療養所が設立された年で有る。国家的医療保護機関という表現で、国民医療を担う覚悟と抱負が述べられている。

「投稿に就て」でも触れられているが、当時は紙は貴重品で有る。その状況において、あえて国の名前ではなく「医療同好会」という組織を作り、諸外国に遅れをとらないように率先して学術誌を発行したことに、先人の思いを痛切に感じるとともに感服する次第である。

国立医療学会の歩み

表1に、国立医療学会の歩みをまとめた。国立医療学会の前身である「医療同好会」の初代会長は、先に述べた塩田氏であった。「医療同好会」は、発足した昭和21年に、旧久里浜国立病院を会長施設として、横須賀において第1回の学術集会を開催している（表2）。その毎年学術集会を開催しているが、会長施設は現在のように各グループで順番に受け持っていたようである。昭和39年第19回総会において

新会則を可決して近代的な組織へと変貌するに至った。昭和43年には、現在も続く「塩田賞」の第1回授賞式が行われた。また、昭和62年には「医療同好会」から国立医療学会と名称を変更した。その後、平成16年には、独立行政法人化にともない会則を変更している。同年には独法化のためか、1年間国立病院総合医学会が開催されなかったが、平成27年には第69回国立病院総合医学会が札幌で開催されている。

「医療」掲載論文数の推移

「医療」は、国立病院機構文献情報センター（東京医療センター内）で創刊号からの各号が保管されている。それらを確認すると、「医療」は、第1巻と第2巻が各4号発行され、第1巻には24編、第2巻には34編の論文が掲載された（図4）。その後第3巻では9号と臨時特集号、第4巻から第69巻までは各12号（9～58巻では国立総合医学会抄録号が増刊号として刊行）が発行されてきた。掲載論文数は第4巻では100編を超え、その後200編前後の論文が掲載されてきた。しかし、平成7年の第50巻以降掲載論文数は減少してきており、この数年は80編前後となっている。医学の学術雑誌が多く発行されるようになり、また電子化を含めて論文が入手しやすいようになって来ているなどの要因も考えられる。しかし、会員数も必ずしも増加していない現状もある。

「医療」掲載論文数の推移

「医療」は、国立病院機構文献情報センター（東京医療センター内）で創刊号からの各号が保管されている。それらを確認すると、「医療」は、第1巻と第2巻が各4号発行され、第1巻には24編、第2巻には34編の論文が掲載された（図4）。その後第3巻では9号と臨時特集号、第4巻から第69巻までは各12号（9～58巻では国立総合医学会抄録号が増刊号として刊行）が発行されてきた。掲載論文数は第4巻では100編を超え、その後200編前後の論文が掲載されてきた。しかし、平成7年の第50巻以降掲載論文数は減少してきており、この数年は80編前後となっている。医学の学術雑誌が多く発行されるようになり、また電子化を含めて論文が入手しやすいようになってきているなどの要因も考えられる。しかし、会員数も必ずしも増加していない現状もある。

最後に

国立医療学会誌「医療」は、壮大な構想の下に創刊され、代々の関係者、所属施設やその職員の協力のもとに刊行されてきている。医療に関わるすべての職種が投稿可能であり、近年のチーム医療遂行を、身をもって具現化してきた医学誌でもある。今後も創刊時の意思を忘れずに、国民医療の推進に貢献できるよう「医療」が発展していくことを望んでいる。

謝辞：創刊号からの「医療」について整理し、その分析を行っていただいた「医療」編集室の菊地元子氏と平石 愛氏、国立病院機構本部の佐藤康一郎氏に感謝します。